



UDC信州
信州地域デザインセンター

2025年度 活動報告書



信州地域デザインセンターとは？

設立の目的

長野県内の都市においては、人口減少に伴う都市のスポンジ化が進み都市機能の維持が困難になっていること、「コンパクト+ネットワーク（立地適正化計画）」、「ウォーカブルシティ」、「スマートシティ」等の概念が掲げられる中、社会情勢の変化や価値観の多様化等により、まちづくりの専門化、高度化、多様化が進む一方で、小規模市町村も多く、専門性のある職員不足など市町村単独では対応が厳しい状況にあり、長野県のサポートに期待が寄せられています。

このため、長野県が主体となって公・民・学が連携し市町村のまちづくりをサポートする広域型のまちづくり支援組織として、令和元(2019)年8月に信州地域デザインセンター（UDC信州）を設立しました。

UDC信州は、市町村が進めるまちづくりを支援する【支える】のほか、行政職員を対象としたまちづくりの人材の育成【育む】、県内外の情報を共有するための情報収集・情報発信【発信する】を行い、これらの活動を通じてまちづくりの「場」を生み出し、令和5(2023年)年度から始まった長野県の新総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン3.0」にもとづく「住む人も訪れる人も快適な空間づくり」の実現に向けた取り組みを進めていきます。



拠点紹介

UDC信州の活動拠点は、長野市の善光寺の門前、中央通り沿いにある、およそ100年前に建てられた歴史ある古民家を、当時の風情を活かしながら明るい空間にリノベーションした建物の2階です。室内には、まちづくりに関する書籍やまちづくり団体の活動の資料などがあり、自由に閲覧することができます。



※スタッフ不在時は施錠されていますのでご注意ください。



信州地域デザインセンター センター長

出口 敦

このたび、今年度の取り組みをここに報告書としてまとめることができましたこと、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

UDC信州の3つの活動方針として、市町村が進めるまちづくりをサポートする「支える」で具体的なプロジェクトの企画・実施支援や体制構築、将来ビジョンの具現化、さらにそれらを担う人材育成として「育む」、そして、県内外の情報を共有するための情報収集・情報発信「発信する」が重要な柱となっています。

今年度の報告実績として、特に3つの活動方針のうち、「育む」に重点をおき、研修の形を発展させ、自治体まちづくりリーダー育成のために実践型・集中型の「信州まちづくりデザインスクール」を令和7年7月から8月にかけて開催し16市町18名が参加されました。

本スクールでは、まちづくりを推進するうえで必要な3つの力「事業構想力」「協働推進力」「価値デザイン力」を兼ね備えた人材の育成を目指すこととし、この3つの力を実践的に身につけるため、本スクールでは、関連分野の第一線で活躍する専門家や実践者による講義と、県内外をフィールドとした課題解決型のプロジェクト演習を組み合わせたプログラム構成で、全国に例のないスクールが提供できました。

閉校後は、演習で立案したまちづくり事業企画案により、予算要求をした自治体もあったとお聞きしており、確実に成果が発現されつつあることを実感しております。

ご協力いただきました講師、関係者の皆様に感謝申し上げます。

活動方針の「支える」では、駅前空間の再整備ビジョンや回遊性の向上、エリアプラットフォームの組成、社会実験など県内26市町の31案件の取り組みについてサポートしてまいりました。

また、UDC信州は、全国で唯一の広域UDCとして、複数市町村をまたぐ広域エリアでの取り組みとなる「しなの鉄道線沿線」、「諏訪湖周辺」そして「蓼科湖、白樺湖、女神湖を核とした山岳観光地『レイクリゾート』」のプロジェクトも関係者と具体的な連携事業など議論を進めてきました。

活動方針の「発信する」では、ホームページやSNS、メールマガジンを活用し、まちづくりの動向やUDC信州の活動を内外へ発信してきました。

開設から7年目に入り、3つの活動方針により、今後もUDC信州は、広域的かつネットワーク型の視点を持ちながら、県内に暮らす人、訪れる人の双方にとって快適で魅力ある空間づくりに向け、関係者と連携し具現化に向けて進めてまいります。

CONTENTS INDEX

信州地域デザインセンターとは？	
拠点紹介	1
センター長からごあいさつ	2
支える 活動報告・支援の状況（総括）	3 - 4
広域プロジェクト（PJ）	
諏訪湖周辺エリア戦略検討会PJ	5 - 8
しなの鉄道線沿線地域の 駅まち空間創出PJ	9 - 10
レイクリゾート創造PJ/茅野市、立科町	11
個別プロジェクト（PJ）	
下諏訪グランドデザインPJ/下諏訪町	12
諏訪市未来PJ/諏訪市	13
小諸駅周辺魅力向上PJ/小諸市	14
信濃大町100人衆会議PJ/大町市	15
中軽井沢地域活性化PJ/軽井沢町	15
戸倉上山田温泉街活性化PJ/千曲市	16
その他PJ	16
エリブラ情報交換会	17 - 18
主なPJのスケジュール	19
育む 活動報告	20
信州まちづくりデザインスクール	21 - 24
コラム	25 - 26
発信する 活動報告	27
HP・SNS	28
おわりに UDC信州スタッフより	29 - 30

支える SUPPORT

【令和7（2025）年度 総括】

ここでは、UDC信州の活動方針のひとつ「支える」について、令和7(2025)年度に行った主な支援の取り組みを紹介します。

●広域支援エリア

広域支援とは、複数市町村と連携して進めているプロジェクトです。令和7年度は、「しなの鉄道線沿線地域の回遊性向上プロジェクト」「レイクリゾート創造プロジェクト」「諏訪湖周辺まちづくりプロジェクト」の3案件があります。

●個別支援エリア

個別支援とは、単独の市町村と進めているプロジェクトです。令和7年度は31案件があり、中心市街地再生、公共施設・公有地活用、観光地再生、ビジョン作成等、市町村から寄せられた様々なテーマのご相談に対し、広域的視点を持ってサポートを進めてきました。



令和7(2025)年度 支援実績

31 案件(26市町)

【令和7（2025）年度 支援エリア】

しなの鉄道線沿線9自治体／
岡谷市・諏訪市・下諏訪町／茅野市・立科町／
小諸市／佐久穂町／上田市／岡谷市／
諏訪市2件／茅野市／下諏訪町／
伊那市／高森町／小海町／千曲市／
中野市／山ノ内町／飯山市／長野市2件／御代田町
飯田市2件／塩尻市2件／富士見町／大町市2件／
松本市2件／佐久市

これまでの支援実績（上記含む）

73 案件(36市町村)

【これまでの支援エリア】

小諸市3件／軽井沢町3件／佐久市6件／御代田町3件
佐久穂町2件／上田市5件／東御市4件／岡谷市3件
諏訪市4件／茅野市3件／立科町／下諏訪町3件／富士見町2件
伊那市3件／駒ヶ根市／箕輪町／飯田市3件／高森町／阿南町
上松町／松本市4件／塩尻市3件／安曇野市／松川村／大町市3件
白馬村／千曲市4件／坂城町2件／須坂市2件／小布施町
中野市／山ノ内町／飯山市2件／長野市3件／信濃町／小海町
※重複があるため全体の案件数と合計は一致しません

これまでの支援内容

鉄道沿線の回遊性向上／スマートシティの検討／移住促進・土地活用／駅前広場の整備／
駅前広場の利活用／観光拠点の整備／観光地再生／空き地・空き家活用／景観計画の作成／
公園の利活用／公共施設・公有地活用／住民主体のまちづくり／
自転車活用・推進計画の実現／地域公共交通の検討／地方創生計画／
中心市街地再生（ビジョン・駅前・商店街）／まちなかの回遊性向上／
都市マス・立地適正化計画／都市計画道路の整備／道の駅整備

UDC 信州
支える
SUPPORT

岡谷駅周辺

岡谷駅は、主に通勤・通学に多く利用される駅です。そのため朝夕の時間帯は北口の交通ロータリーに学生の送迎に來た車が集中する状況です。駅前のラオカヤは、令和8年度から解体することが決まっており、跡地利用について官民で議論を行っています。徒歩圏内には、岡谷市以外からも買い物客が集まる商業施設などが立地しています。また、諏訪湖畔には公園や「SUWAKO」のモニュメント、水上カフェなど魅力的な施設、空間も立地しています。

テーマ毎の検討において、「①駅と湖畔をどうつなぐか」のグループでは

駅を降りてから諏訪湖に向かうまでの動線に着目しました。諏訪湖への動線を考える上では、現在あまり活用されていない南北自由通路を通行だけではなく滞留・滞在できる空間として活用することにより、岡谷駅北側から南側への人の流れを作り出そうと考えました。そこで南北自由通路にはテーブルやベンチなど様々な人が滞在できる什器を設置すると共に、アート展示やインフォメーション機能なども導入することで徹底的に南北自由通路の活用方策を検討しました。

「②駅周辺の居心地の良い空間」のグループでは、岡谷駅の主な利用者で

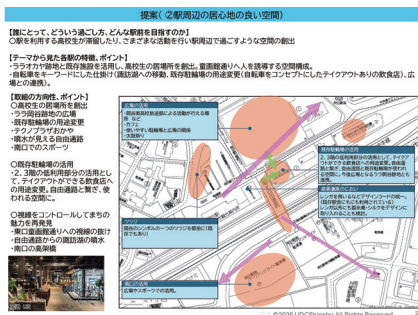
ある高校生をターゲットに、滞留だけではなく、高校生の活動も意識して議論を行いました。岡谷駅前自転車駐車場の2階、3階があまり使われないことから、テイクアウトができる飲食店へのリノベーションを行い、南北自由通路やラオカヤ跡地での滞留活動の促進を考えました。



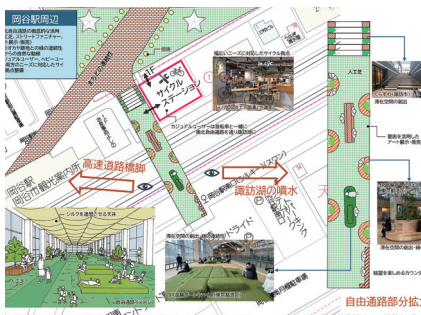
南北自由通路のアイディアパース



①駅と湖畔をどうつなぐか



②駅周辺の居心地の良い空間



南北自由通路検討案

下諏訪駅周辺

下諏訪駅は、諏訪大社下社春宮、秋宮の観光への玄関口であると共に、学生が通学等で日常的に利用されている駅です。駅周辺の商店街では、空き店舗をリノベーションした個性的で魅力的な店舗が立地しています。駅舎2階からは、諏訪湖と共に富士山を望むことができます。諏訪湖までは3駅の中で最も離れていますが、赤砂崎公園

園では民間による複合施設が建設され(R8.4)、今後諏訪湖畔の魅力が一段と高まることが期待されています。「①駅と湖畔をどうつなぐか」のグループでは、徒歩でなく自転車やグリーンスローモビリティによりまちなかを回遊しながら諏訪湖まで移動することを想定し、モビリティハブ機能を駅前に設置することを検討しまし

た。また、駅前広場の歩行者動線と車両の動線を整理することで、ゆとりのある歩行者空間を確保することについて議論しました。さらに、下諏訪駅の利用者に諏訪湖畔の赤砂崎公園などの魅力を伝え、諏訪湖に行きたくないような案内、サインなどの必要性も議論しました。「②駅周辺の居心地の良い空間」の

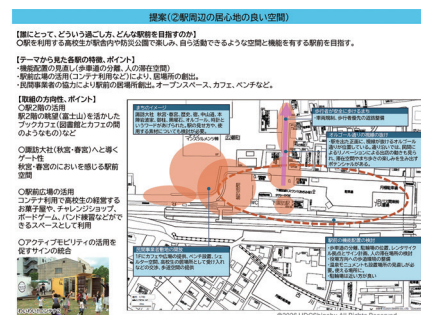
グループでは、駅前広場にコンテナハウスを設置し、高校生がチャレンジショップやバンド練習などの活動ができる空間と機能の設置を検討しま

した。また、駅前から国道20号までの通称「オルゴール通り」と駅前広場を視覚的に繋ぎ、諏訪大社へと導くゲート性を持たせた空間整備を検討しま

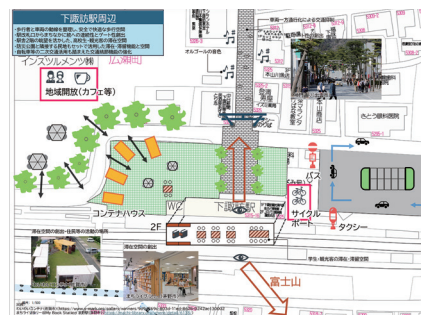
した。駅舎2階からの眺望(富士山)を活かしたブックカフェによる滞在空間の創出も検討しました。



①駅と湖畔をどうつなぐか



②駅周辺の居心地の良い空間



下諏訪駅前広場検討案

上諏訪駅周辺

上諏訪駅は、3駅の中で最も利用者が多く、通勤・通学の利用に加え観光での利用者も多い駅です。諏訪湖までの距離も3駅の中で最も近く、柳並線の開通に伴い駅から諏訪湖まで行きやすくなりました。駅周辺には温泉街や酒蔵、リノベエリアなど魅力的なエリアが点在しています。今後は上諏訪駅西口広場の整備が予定されており、上諏訪駅の新たな顔となる広場の整備が期待されています。

「①駅と湖畔をどうつなぐか」のグ

ループでは、駅から諏訪湖までの一体的な体験の提供を意識し、花火を活かしたモチーフやデザインを路面や歩道に設置することを検討しました。また、柳並線の沿道も活用することで、諏訪湖まで楽しく歩いて移動できる提案としました。さらに現在西口にはレンタサイクルポートなどがないことから、西口に諏訪湖周辺の回遊拠点となるモビリティステーションの設置について議論をしました。

「②駅周辺の居心地の良い空間」グ



①駅と湖畔をどうつなぐか



②駅周辺の居心地の良い空間



柳並線検討案

KEY PERSON's VOICE

2市1町の駅から諏訪湖を巡るフィールドワークは、各市町村の駅前の特徴を知る貴重な機会となりました。まちづくりの視点からそれぞれの市町を見ることで、新たな気づきを得ることができ、今後の観光施策に生かしていきたいと考えております。駅前と諏訪湖を結び視点の重要性も改めて実感いたしました。

岡谷市 商業観光課
林 大誠 さん

KEY PERSON's VOICE

行政の垣根を越えたエリア戦略検討会議は、広域連携の重要性を実感する貴重な機会でした。フィールドワークやアドバイザーの助言を通じ、諏訪市を客観的に見つめ直す機会にもなり、新たな視点を得ることができました。普段は接点のない他市町の職員やアドバイザーの三牧さん原さんとの会議以外の場も含めた交流は、純粋に有意義であり、大きな刺激にもなりました。

諏訪市 まちづくり整備課
笠原 彰 さん

KEY PERSON's VOICE

ケーススタディを通じて、町内を改めて歩くことで、町の新たな課題や魅力を発見することができました。どのようにすれば下諏訪駅周辺が町の玄関口として魅力的な、安全な空間になるか、また、どのようにすれば駅を出発点として、諏訪湖畔を含む町内への回遊につなげられるかケーススタディを通じて検討会の皆さんと考える貴重な機会となりました。

下諏訪町 総合政策課
安藤 仁志 さん

KEY PERSON's VOICE

2市1町の職員が「湖畔と駅前の接続性」という共通テーマのもとで議論を重ねることで、各地域の課題や強みへの理解が深まりました。諏訪湖という豊かな自然資源を核に広域連携が進むことで、湖畔から駅前へと魅力がつながり、人々が湖畔を巡りながら自治体の垣根を越えた一体感のある連続的で心地よい空間体験が創出されることを期待しています。

千葉大学 特任准教授
原 裕介 さん

沿線の駅やその周辺に居心地の良い空間を創出！

しなの鉄道線沿線地域の駅まち空間創出プロジェクト

しなの鉄道線沿線地域

しなの鉄道線沿線地域

プロジェクト概要

多くの観光客が訪れるしなの鉄道線沿線地域において「地域の顔である駅や駅周辺の空間を、地域住民や観光客等、来訪者にとって居心地が良く集いとなる空間にしていこう」とを目的に、沿線自治体としなの鉄道、上田電鉄、CCC、UDC 信州で検討会議を行うなど、沿線まちづくりのプロジェクトを推進しています。

基本情報

市町村名／軽井沢町、御代田町、佐久市、小諸市、東御市、上田市、坂城町、千曲市、長野市

人口（2026/1/1現在）／約800,000人（9市町合計）

面積／約2,411km²（9市町合計）

主な観光地／軽井沢高原、浅間高原、中山道5宿、懐古園、湯の丸高原、上田城、さき千曲川パラ公園、戸倉上山田温泉、善光寺



「駅まち空間検討会議」での情報交換会の様子

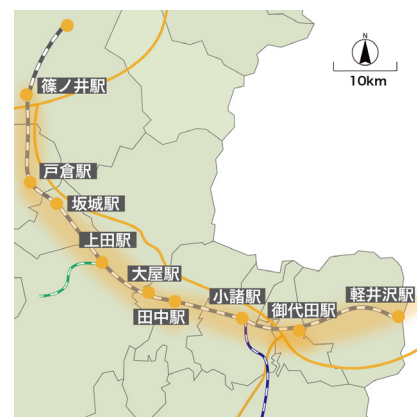
プロジェクト説明

しなの鉄道線沿線地域には、魅力的な地域資源が多数存在し、沿線全体で年間約2,800万人の観光客が訪れる長野県内有数の観光エリアです。また、沿線9市町で県内人口のおよそ4割を占める地域であり、北陸新幹線や関越道など交通の利便性が高く、リモートワークの普及や教育移住などにより、居住先としても注目度が高まっている地域でもあります。

令和元年のUDC信州発足以後、沿線自治体から寄せられていた「地域

交通」や「中心市街地活性化」の課題解決のため、「上田市・千曲市広域シェアサイクル社会実験」などを手掛けてきました。

R6年度は、「駅まち空間検討会議」を設置し、人々が集い交流を促すような上質な場所を産みだすために、駅および駅周辺の空間の質を高める検討を開始しました。R7年度はR6の検討を受けて、駅まち空間の各種調査を行いました。



上田駅のAIカメラ人流調査



中軽井沢駅のAIカメラ人流調査



環境型エリアマネジメント会社の紹介

上田駅、中軽井沢駅の現況調査

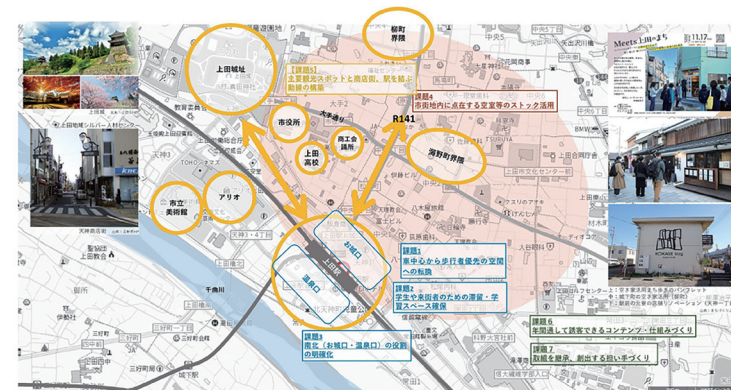
令和7年度は、沿線の中核的な駅である上田駅と、地元×観光用途が混在する代表駅として中軽井沢駅の現地調査を行いました。具体的にはAIカメラを用いた人流調査、駅を利用する人へのヒアリング調査、商工会議所や駅付近の事業者などへのインタビュー調査を行いました。

上田駅は、広域交通の要衝であり駅前広場が車両を優先する構造に

なっています。このため歩行者空間が車道により分断されている状況です。今後は車中心から歩行者が安心して利用できる空間への転換が求められます。学生の学習場所や滞留空間の確保、さらには主要観光拠点と商店街を結ぶ回遊性の向上などが今後の駅まち空間における検討点です。

中軽井沢駅は図書館等の交流機能が充実していますが、駅の賑わいが

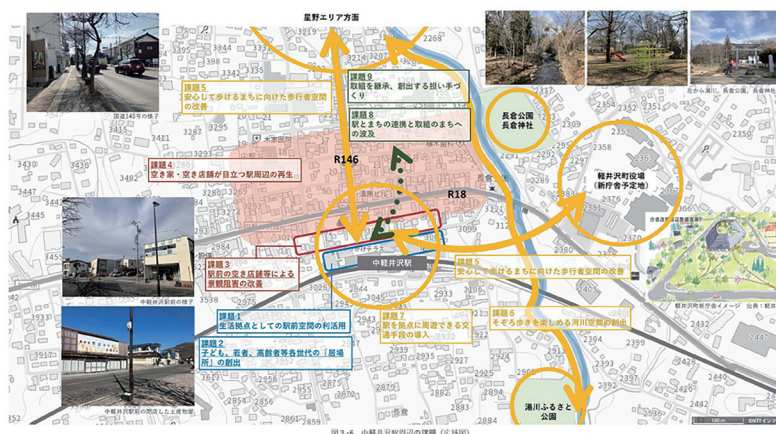
周辺商店街へ波及せず分断されている点が課題です。また、歩道の狭さによる回遊性の阻害も挙げられます。今後は駅を単なる通過点にせず、多世代が日常的に集える「居場所」の創出や、安全な歩行環境の整備を通じた回遊動線の構築が求められています。



上田駅周辺の課題



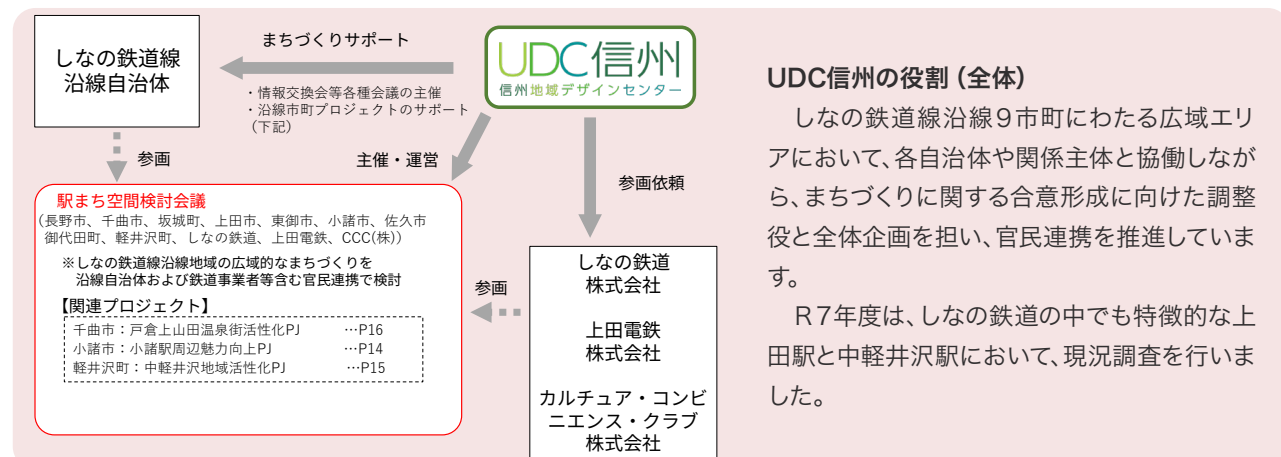
駅まち空間検討会議



中軽井沢駅周辺の課題

今後の展開

令和8年度は「広域まちづくりビジョン」を策定予定です。沿線地域をひとつの「まち」としてとらえ、どんなまちを創っていくのか、ステークホルダー指針とするための内容を練り上げていきます。



体制図

令和6年度

駅まち空間創出の検討

- ✓駅まち空間検討会議の開催（全5回）
- ✓検討会議報告書の作成
令和6年度総括会の開催
- ✓広域シェアサイクル
正式導入

スケジュール（全体）

令和7年度

駅まち空間の詳細調査と情報交換

- ✓AIカメラを用いた中軽井沢駅、上田駅人流調査
- ✓2駅の利用者、近隣事業者へのインタビュー調査
- ✓軽井沢T-SITE等、沿線で起こっている動きを沿線市町と事業者で共有

令和8年度（予定）

沿線地域の広域まちづくりビジョン策定

- ✓沿線地域をひとつの「まち」と捉え、広域まちづくり指針策定
- ✓民間企業含め外部者へ当該地域をPR、まちづくり参画者を増やす
- ✓並行して、各地の情報交換や市町まちづくりの支援

日本のレイクリゾートの象徴となるエリアを目指す レイクリゾート創造プロジェクト

茅野市、立科町

プロジェクト概要

令和3年度に白樺湖観光センター周辺の再整備について茅野市から相談があり、検討を進めていました。令和4年度には周辺の湖を含む「レイクリゾート構想」が発表され、構想の実現に向け、レイクリゾートに関わる各主体が「蓼科・白樺高原レイクリゾート構想基本方針」を共有しながら、地域づくりを進めています。

基本情報

市町村名／茅野市、立科町
人口（2026/1/1現在）／約61,000人（2市町合計）
面積／約333km²（2市町合計）
主な観光地／白樺湖、蓼科湖、女神湖、蓼科山、ハケ岳

プロジェクト説明

茅野市の蓼科湖、立科町的女神湖、両市町にまたがる白樺湖の3つの湖は、農業用に作られた人工ため池ですが、各エリアの重要な観光資源としても親しまれてきました。しかし、観光客の減少、老朽化した施設による景観面での悪影響など、様々な問題が発生してきています。

近年、民間の新規事業者の出店など新たな動きが出てきている中で、上記の問題を解決するとともに、官民連携して3つの湖をつなげ日本のレイク

リゾートの象徴的なエリアとすることを目指す「レイクリゾート構想」が令和4年7月に発表されました。

令和6年度には、エリアを超えて民間事業者、観光協会や土地所有者等の複数の関係者が集まり議論をし、その成果を「蓼科・白樺高原レイクリゾート構想基本方針」として取りまとめました。令和7年度は、その実現のため実行組織の組成を目指し、設立準備会を開催しました。



レイクリゾート構想基本方針の報告会



特色ある4つのエリアのありたい姿の実現に向けて！ 下諏訪グランドデザインプロジェクト

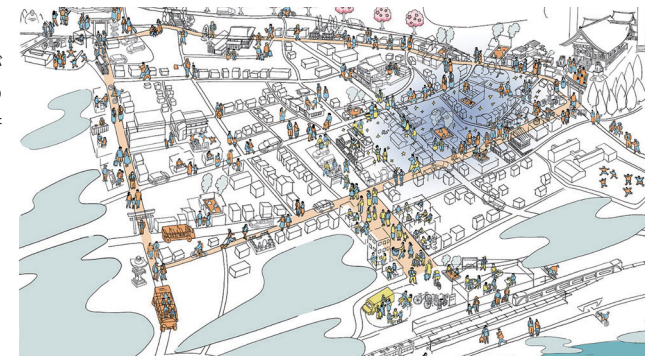
下諏訪町

プロジェクト概要

令和2年度に下諏訪町内のグランドデザインを策定したいという相談があり、下諏訪町と進め方について議論しました。令和3年度から、町内の4地区において順次ワーキンググループ・委員会を立上げ、基本理念、俯瞰図及び要所図を記載したグランドデザインの策定を行なっています。

基本情報

市町村名／下諏訪町
人口（2026/1/1現在）／約18,000人
面積／約67km²
主な観光地／諏訪大社下社秋宮・春宮、諏訪湖、八島湿原



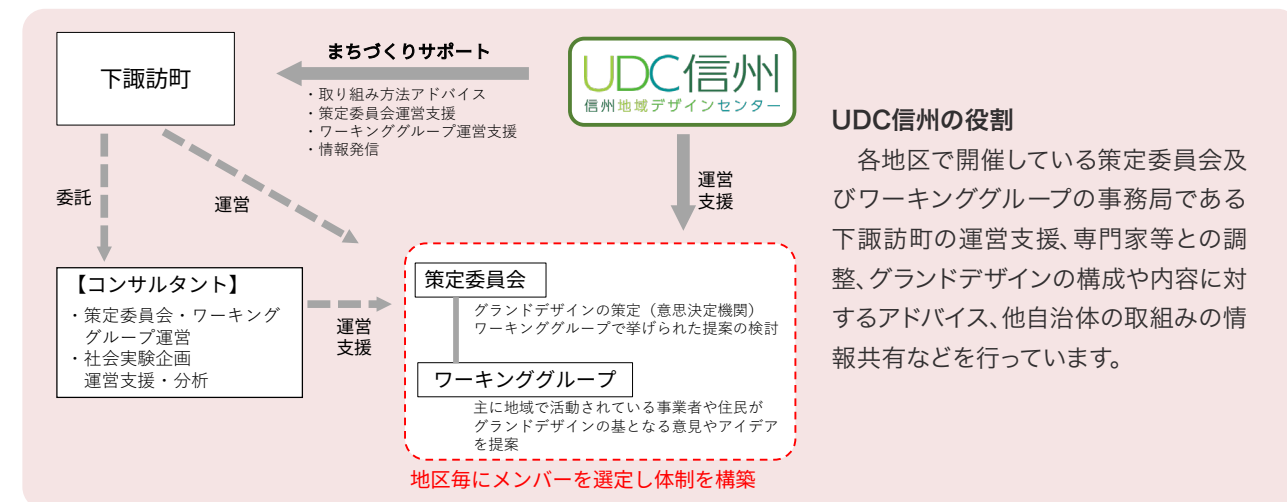
三角八丁周辺地区 俯瞰図

プロジェクト説明

下諏訪町には、諏訪大社下社春宮・秋宮周辺の歴史的な街並みや、諏訪湖畔のアクティビティなど魅力的なエリアが多く存在しますが、それらがまちなかの回遊につがっていないという課題があります。そこで下諏訪町では、将来像を共有するため4地区でグランドデザインの策定を進めており、令和7年度は、社地区と三角八丁周辺地区の取り組みを行いました。

道路整備が予定される社地区では、眺望を楽しむ姿や新たな地域活動な

ど多様な姿を示したグランドデザインが完成し、歴史・文化が残る三角八丁周辺地区では、下ノ諏訪宿地区や下諏訪駅、秋宮・春宮を含むエリアを対象に、基本理念と俯瞰図が策定されました。



体制図

令和6年度

- グランドデザイン策定
- ✓ 諏訪湖畔地区 要所図策定
- ✓ 社地区（新規） 基本理念、俯瞰図策定
- 実現に向けた取り組み
- ✓ 回遊性向上の実証実験

令和7年度

- グランドデザイン策定
- ✓ 社地区 要所図策定
- ✓ 三角八丁周辺地区（新規） 基本理念、俯瞰図策定
- 実現に向けた取り組み
- ✓ 回遊性向上の実証実験

令和8年度（予定）

- グランドデザイン策定
- ✓ 三角八丁周辺地区 要所図策定
- 実現に向けた取り組み
- ✓ 回遊性向上の実証実験

スケジュール

今後の展開

令和8年度は、三角八丁周辺地区の策定を引き続き進めるとともに、完成している諏訪湖畔地区、下ノ諏訪宿地区、社地区のグランドデザイン実現に向けた取り組み支援をしていく予定です。

自分たちが欲しい上諏訪駅周辺のミライを自ら考え、自ら実現していく！ 諏訪市未来プロジェクト

諏訪市

プロジェクト概要

令和2年度に上諏訪駅周辺のまちづくりに関する相談から動き出し、令和4年度に官民連携による「上諏訪駅周辺まちなか未来ビジョン」を策定。その後、令和5年度にはビジョン実現に向けた社会実験と具体化を検討する官民連携エリアプラットフォーム「スワ・マチ・ミライ」を設立しました。

基本情報

市町村名／諏訪市
人口（2026/1/1現在）／約47,000人
面積／約110km²
主な観光地／諏訪湖、上諏訪温泉、諏訪大社上社本宮、霧ヶ峰高原

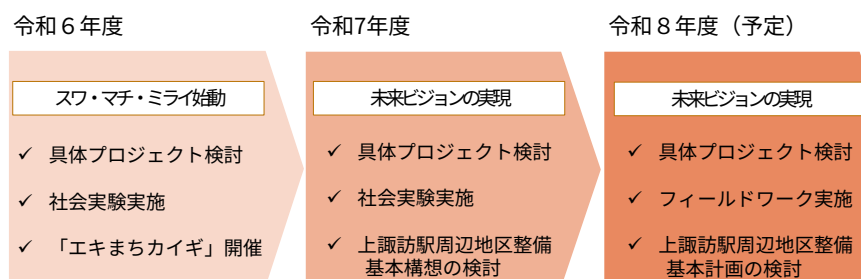
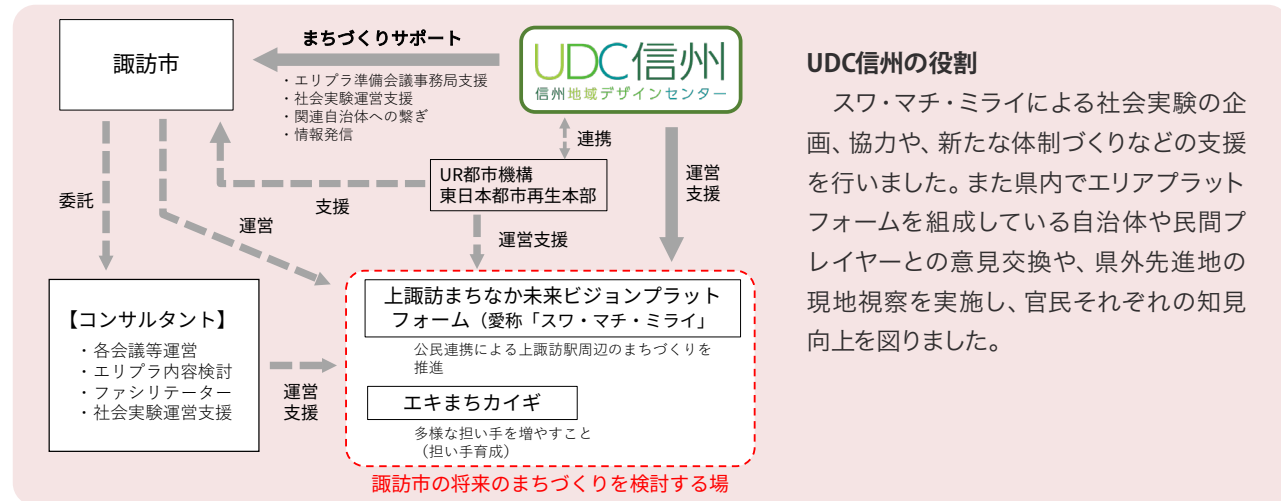


社会実験「スワマチスローハイク」の様子

プロジェクト説明

未来ビジョンに掲げるウォークアブルエリアの形成に向けて、「スワ・マチ・ミライ」のメンバーが中心となり約1か月間の参加型社会実験を行いました。今年度の社会実験は、冬季に開催し、寒い時期にどうやってまちなかに人流を増やすことができるかを考えながらコンテンツを企画しました。また今年度は、自動車の一方通行エリアを

設け、昨年度課題だった歩車共存のあり方も検証しました。3年間継続した社会実験により様々な課題やノウハウが蓄積してきました。それらを活かして引き続き未来ビジョンの実現を目指して進んでいきます。



スケジュール

今後の展開

令和8年度はスワ・マチ・ミライのプロジェクトの活動や持続的な運営方法を一緒に検討すると共に、上諏訪駅やその周辺の公共空間の将来像や活用方法検討の支援を行っていきます。

魅力高まるまちなかへ足を延ばそう！ 小諸駅周辺魅力向上プロジェクト

小諸市

プロジェクト概要

平成29年に小諸市、UR都市機構、URリンケージで「多極ネットワークコンパクトシティによる都市再生に関する基本協定」を締結しました。令和元年度にUDC信州設立以降、URグループと連携して小諸駅周辺のまちづくり支援を実施しています。

基本情報

市町村名／小諸市
人口（2026/1/1現在）／約41,000人
面積／約99km²
主な観光地／浅間山、懐古園、高峰高原、布引観音、北国街道・小諸宿



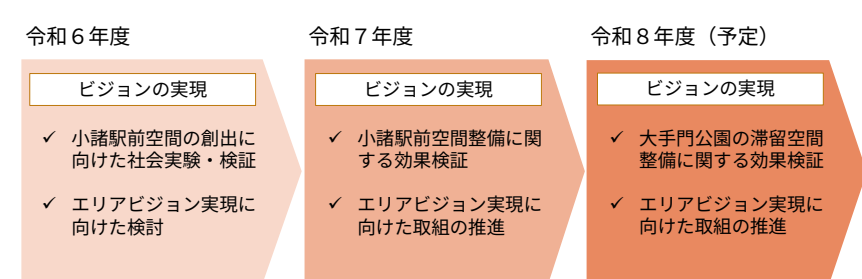
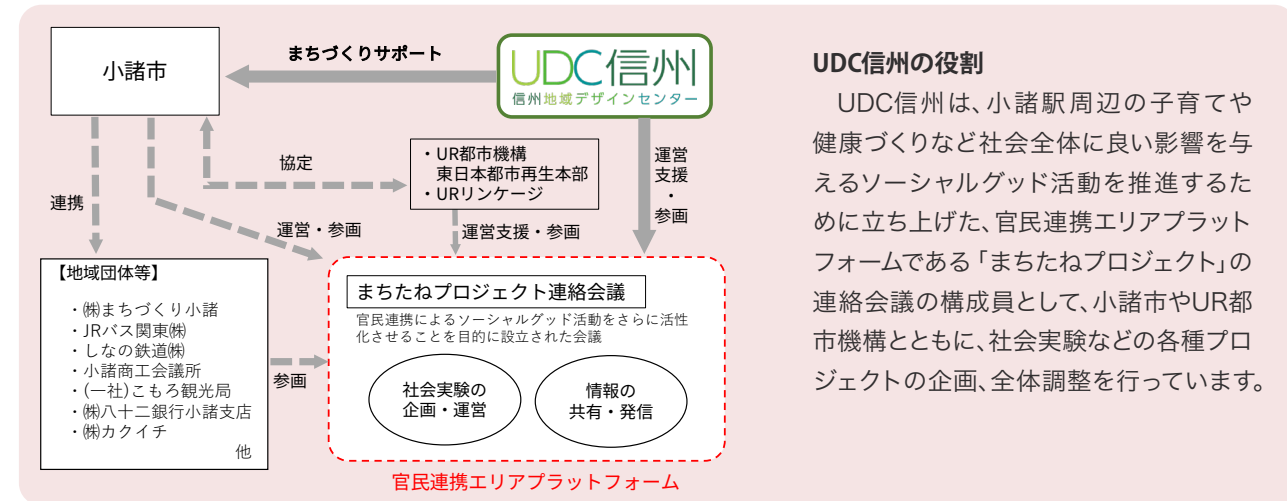
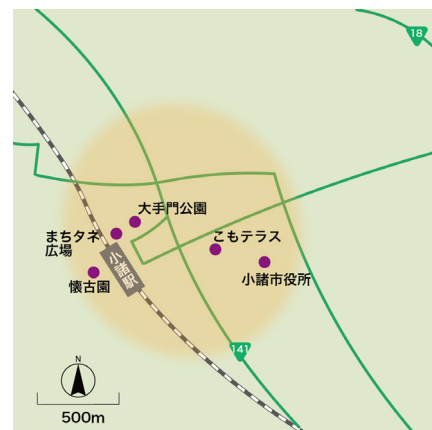
「こもろ・まちたねプロジェクト連絡会議」の様子

プロジェクト説明

小諸市は、小諸駅西側に観光名所の懐古園がありますが、東側の中心市街地は魅力向上に課題を抱えていました。そこで、平成29年度の小諸市とURグループによる協定締結を契機に、UDC信州も市が掲げるまちの将来像実現に向け、支援を行ってきました。

小諸市では令和7年度は、地域情報発信や事業者・プレイヤーの連携

促進に向けたプラットフォームアプリ「Komomag」のリリース、グリーンスローモビリティの需要や消費行動への波及効果などを把握するDX社会実験を実施し、さらなる回遊性向上に取り組みました。また、駅前広場内の歩行者滞留空間や周辺サイン等の機能実装の社会実験を実施し、駅前広場整備に向けた検証を行いました。



スケジュール

今後の展開

令和8年度は、大手門公園の滞留空間整備に関する効果検証やアプリの機能拡張等を引き続き行うとともに、UR都市機構が所有する歴史的建築物（カフェ・工房・ショップとしてR8オープン予定）とも連携し、エリアビジョン実現に向けた取り組みの支援を実施していく予定です。

信濃大町100人衆会議プロジェクト

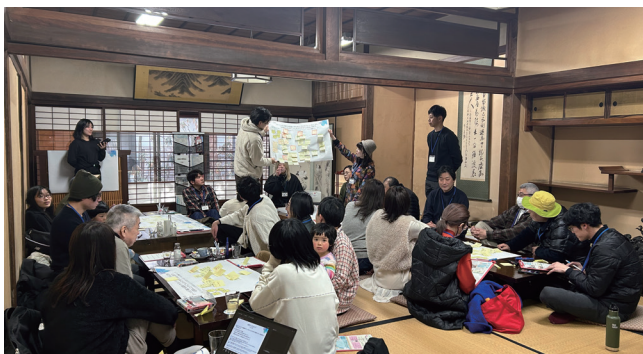
大町市

プロジェクト概要

令和元年度に中心市街地再生を進めるにあたり、官・民の取り組み連携の進め方で相談がありました。令和2年度から、高校生主体で地域人の紹介冊子の作成や、庁内ワーキンググループなどを実施、令和3年度には社会実験を行い、プラットフォームの構築・未来ビジョンの策定を行いました。

基本情報

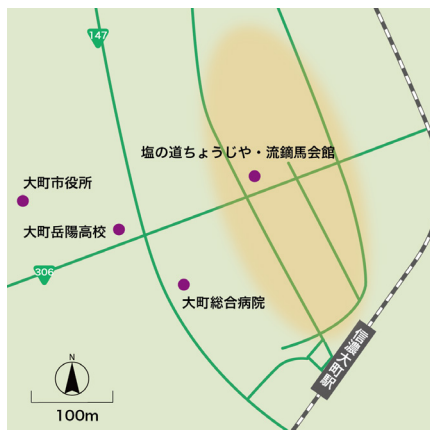
市町村名／大町市
人口(2026/1/1現在)／約25,000人
面積／約565km²
主な観光地／黒部ダム、立山黒部アルペンルート、仁科三湖



まちなかやりたいこと交流会の様子

プロジェクト説明

令和5年度のビジョン公表後、まちなかの魅力を活かした「ひと」中心の取り組みを進めてきています。令和7年度は、「まちなかやりたいこと交流会」を2回開催し、まちなかで「やりたいことがある人」と「活動している人」を知ってつながる場を提供するなど、エリアプラットフォームを拡げていくための活動をしています。



今後の展開

令和8年度は、会議が進めたいまちなかのプレイスメイキング活動や、市内外の人々とのネットワーク構築の支援等を行っていきます。

官民連携で「新たな軽井沢」をうみだす！

中軽井沢地域活性化プロジェクト

軽井沢町

プロジェクト概要

令和6年度に、中軽井沢地域のまちづくりに関連し、国交省制度「官民連携まちなか再生推進事業」の活用について相談がありました。令和7年度に中軽井沢エリアプラットフォームが設立され、UDC 信州はアドバイザーの立場でまちづくりをサポートしています。

基本情報

市町村名／軽井沢町
人口(2026/1/1現在)／約21,000人
面積／約156km²
主な観光地／旧軽井沢銀座通り、雲場池、白糸の滝、ハルニレテラス、軽井沢タリアセン



ナカカル AP 設立式の様子

プロジェクト説明

中軽井沢エリアは、役場庁舎等の建替えが予定されている一方、空き店舗増加や渋滞による環境悪化等でまちの活力が減退しています。令和7年度に民間発意により官民連携エリアプラットフォーム(ナカカルAP)が設立、まちづくり勉強会やワークショップを開催し、まちの課題把握やアクションに向けた取り組みが行われ始めています。



今後の展開

令和8年度は予定されている社会実験の支援やエリアビジョン検討等、エリアプラットフォームへのアドバイザーとしてサポートしていきます。

そぞろ歩きが出来る、懐かしくも新しい温泉街へのRebornを目指して

戸倉上山田温泉街活性化プロジェクト

千曲市

プロジェクト概要

令和3年度に戸倉上山田温泉の活性化について相談がありました。本地区は、温泉街に隣接する県道の改良工事が計画されており、通過交通の通り抜けが多い温泉街の交通状況も大きく変化する可能性も想定されます。この状況を契機に、改めて温泉街のあり方を検討しています。

基本情報

市町村名／千曲市
人口(2026/1/1現在)／約58,000人
面積／約119km²
主な観光地／戸倉上山田温泉、あんずの里、姨捨の棚田、森將軍塚古墳



推進会議部会でのまち歩きの様子

プロジェクト説明

県下有数の温泉地である本地区は、コロナ禍等による観光客の大幅な減少を受け、改めて温泉街の魅力向上が必要だと官民共に感じています。その中で、隣接する県道の改良事業が具体化された事を契機に、中央通りを含む温泉街のあり方の検討が始まりました。令和7年度は、昨年度に引き続きワークショップを開催し、目指すべきまちづくりのテーマや、まちの課題解決に向けたプロジェクトの方向性が決定しました。



今後の展開

令和8年度は、これまでの推進会議部会での議論を踏まえたランドデザイン策定や社会実験実施の支援等により、官民連携体制の構築を進めていけるように支援していきます。

その他の進行中プロジェクト

官民共創の新しいまちづくり推進PJ／伊那市

伊那北駅周辺の将来像、まちなかエリアのリノベーション、伊那弥生ヶ丘高校の将来活用の検討など、官民共創による「新しいまちづくり」を進めています。



官民連携まちづくり支援PJ／佐久市

中込駅周辺エリアでエリアプラットフォームの設立を目指しています。

中心市街地のビジョンづくりと公共施設再編PJ／岡谷市

ラオカヤ跡地利用を含む岡谷駅周辺のまちづくりを進めています。

信州エリプラ情報交換会

プロジェクト概要

官民でまちづくりを進めるエリアプラットフォームの設立や、運営に関する相談がUDC 信州に増えていました。そこで、行政職員や民間事業者同士の情報交換・相互刺激を目的として「信州エリプラ情報交換会」を設立し、集合知による官民連携のまちづくりの促進を図っています。



第1回信州エリプラ情報交換会の様子

プロジェクト説明

UDC信州が支援しているいくつかのプロジェクトでは、官民連携によるエリアプラットフォーム（以下エリプラ）を組織し、まちづくりを進めています。一方で、事務局を担う市町村担当者はその運営、方向性などに悩みながら進めていました。しかしながら県

内でエリプラを運営している自治体や、エリプラの組成を目論む自治体の職員同士の繋がりが希薄であり、情報共有が進んでいませんでした。

そこでUDC信州では、他市町村のエリプラ組成・運営のノウハウ・情報共有によるエリプラによるまちづくり

の推進と、エリプラに関わる市町村職員や民間事業者の繋がりが強化・相互刺激を目的として「信州エリプラ情報交換会（以下情報交換会）」を立ち上げました。

第1回信州エリプラ情報交換会

初回となる情報交換会は、令和7年6月26日（木曜日）にエリアプラットフォームに相当する官民の組織を立ち上げて運営している県内の5自治体（小諸市、松本市、諏訪市、伊那市、駒ヶ根市）の行政担当者の皆様に小諸市のまちねLABOにお集まりいただき開催しました。

情報交換会では、まず参加自治体からの取組紹介をしていただき、まちの課題やエリプラ立ち上げの経緯、体制、予算規模などを共有し、情報交換を行いました。意見交換では、エリプラの事務局を担当する自治体職員が日々の業務のなかで抱える悩みや課題を共有し、他の自治体職員が自ら

の自治体ではこんな方法を取っているなど解決に繋がるヒントを共有したりと、参加者にとって非常に有意義な意見交換を行うことができました。ラフな雰囲気でも普段は言えないあんな悩み、こんな悩みを共有し、参加者全員で議論、意見交換することができました！

第2回信州エリプラ情報交換会

2回目となる情報交換会は第1回目に参加していただいた自治体の行政担当者に加え、各エリプラ活動などに関わっている民間事業者の方にも参加いただき、令和7年10月17日（金曜日）に松本市のMウイングにて開催しました。

まず開催都市である松本市から三

の丸エリアプラットフォームの取組説明の後に、エリプラ活動の舞台となっている場所を現地視察しました。参加者の皆さんは現地を見ながら、自らのまちと比較し、自分たちだったらどんなことができるのか話ながら視察しており、松本市のエリプラの取組から多くの刺激を貰っていたようです。

現地視察後は参加者全員で意見交換を行いました。エリプラの活動やまちづくりに関わっている想いやきっかけを聞かれた民間の方からは、「まちが変わっていく様子が楽しいからやっている！」「プロジェクトXに取り上げられるのが夢！」「自分が住んでいるまちがもっと良くなって欲しいか



松本市の取り組み説明

ら！」といった想いを語ってくれました。業務としてまちづくりに携わっている行政職員にとって、まちづくりってもっ

第3回信州エリプラ情報交換会



第3回信州エリプラ情報交換会の様子

3回目となる情報交換会でエリプラに携わる行政職員同士の輪をさらに広げるために、第1回と第2回に参加した自治体に加えエリプラを新たに立ち上げた自治体や立ち上げを検討している自治体を加えた計15自治体（軽井沢町、佐久市、小諸市、上田市、岡谷市、諏訪市、下諏訪町、伊那市、駒ヶ根市、飯田市、高森町、松本市、塩尻市、大町市、千曲市）の行政職員の方々に諏訪市役所にお集まりいただき、令和8年2月12日（木曜日）に開催しました。

まずは参加自治体毎の自己紹介を行っていただき、各自治体でどんなことが課題で、どんなまちづくりの取組を行っているかなどを共有しました。

諏訪市の社会実験「スワマチスローハイク」を視察し、社会実験の企画を

と気軽に楽しいものだ気付かされた瞬間でした。業務としてまちづくりに携わっていますが、自分もそのまちに住んでいる住民であることは変わらないので、いい意味で公私混同してまちづくりに関わることができるのだと感じました。今回初めて参加していただいた民間の方からも、松本市のエリプラの取組から多くの刺激を貰い、自分のまちでももっと頑張らないといけないと言った声を頂きました。行

政と官民の枠を超えて多くの繋がりが生まれた第2回の情報交換会でした。



松本市現地視察の様子

参加者の中からまちづくり会社を立ち上げる職員が出てきて欲しいですね！

その他UR都市機構から鹿児島市のエリプラの取組紹介、長野県都市・まちづくり課からはエリプラの活動で活用できる補助金の情報提供など盛りだくさんの内容でした。

参加者の皆さんからは、自らの自治体のエリプラ組成や運営にあたり非常に参考になったという声があり、全ての参加者から次回の開催を望む声がありました！

今後もエリプラに関わる官民の繋がりが強化のため、信州エリプラ情報交換会を開催していきます！官民の力を合わせて長野県のまちづくりを盛り上げていきましょう！



諏訪市社会実験の視察

KEY PERSON's VOICE

まちづくりは他の地域で成功している事例をそのまま自地域で活用しても成功するとは限らないからこそ、様々な事例から学ぶことが重要であると感じています。エリプラ情報交換会に継続参加することで、多種多様かつ具体的な手法や、現場での取組事例などを学ぶことができ、この会が「まちづくり推進に向けた学びの場」として貴重な拠り所となっています。

伊那市 地域創造課
飯島 峰貴 さん



KEY PERSON's VOICE

第3回に参加させていただきました。塩尻においても、おじり街元気カンパニーとエリプラの組成や具体的なアクションを検討する中で、県内各地の官民連携による取組事例や、実際に運営する中での課題・工夫など貴重な情報を得られ、大変参考になりました。また、こうした会議を通じて、各自治体のまちづくり担当者や直接意見交換できる機会も非常に有意義でした。

塩尻市 商工課
岡村 雅斗 さん



KEY PERSON's VOICE

情報交換会では中込地区の官民連携の取り組みを事例発表させていただきました。他地区の先進的な手法やプラットフォーム運営について直接意見交換ができ、今後の施策展開への大きなヒントをいただきました。このネットワークを大切に、地域の特徴を生かした魅力あるまちづくりへ繋げていきたいと思っています。

佐久市 都市計画課
奈良澤 剛 さん



KEY PERSON's VOICE

県内各自治体の担当者が一堂に会し、成功事例だけでなくプラットフォーム組成までの苦労や組織運営の悩みを共有出来る非常に有意義な会議でした。最初から完璧な計画を目指すのではなく、小さな社会実験から機運を醸成していきながら、日常的な活動へ繋げていく視点を取り入れ、本市の「歩いて楽しめる温泉街づくり」を目指していきます。

千曲市 都市計画課
唐沢 清雅 さん



令和7(2025)年度 主なプロジェクトのスケジュール

プロジェクト名／年度	R4	R5	R6	R7	R8（予定）
諏訪湖周辺エリア戦略 検討会PJ 【P5～P8】		諏訪湖周辺エリア戦略検討会			
	・諏訪湖周自転車活用推進協議会				・具体PJの検討体制構築
	・整備ガイドラインの検討	・ルールの周知 ・諏訪湖サイクリングロード完成	・サイクリングロード開通式 ・計画改定検討	・計画改定検討	・計画改定検討
しなの鉄道線沿線地域の 広域まちづくりPJ 【P9～P10】		・第二期勉強会（R4～） （沿線8市町+鉄道事業者2社 +UDC信州で構成）	・駅まち空間検討会議（R6～） （沿線9市町+民間事業者3社 +UDC信州で構成）	・沿線の駅まち空間の調査 （上田駅、中軽井沢駅）	・沿線まちづくりビジョンの 策定、専門家会議 ・ビジョン策定に係る 関係自治体との協議会
レイクリゾート創造PJ 【P11】	・観光センター周辺のWG 設置に向けた検討 ・レイクリゾート構想発表 ・広域（3湖周辺）の現状把握	・観光センター周辺のWG ・観光センター周辺整備計画策定 ・広域エリアの実態調査 ・広域エリアの検討体制検討	・計画実現に向けた事業手法 の検討等 レイクリゾート基本方針の策定 ・調整会議の開催 ・関係者へのヒアリング	・構想実現のための 新組織設立準備	・新組織の設立 ・基本方針の取組の実施
下諏訪グランドデザインPJ 【P12】	・対象地区のグランドデザイン策定委員会及びワーキンググループ				
	・下ノ諏訪宿地区要所選定 ・諏訪湖畔地区基本理念、 俯瞰図策定	・下ノ諏訪宿地区要所図策定 ・諏訪湖畔地区実証実験等 ・諏訪湖畔地区要所選定	・諏訪湖畔地区実証実験等 ・諏訪湖畔地区要所図策定 ・社地区基本理念、俯瞰図策 定	・下ノ諏訪宿地区実証実験等 ・社地区要所図策定 ・三角八丁周辺地区基本理念、 俯瞰図策定	・三角八丁周辺地区要所図策 定 ・グランドデザインの実現に 向けたまちづくり （ハード・ソフトの取組）の 検討
	・社会実験等の実施（R4～R7） R4 下諏訪宿本陣 R5 「湖畔日和」 R6 「湖畔日和2024 ～水辺で散走まちさがし。～（レンタサイクル）」 R7 地域回遊実証実験		 		
諏訪市未来PJ 【P13】	・未来ビジョン策定会議 ・未来ビジョン策定	・エリブラ構築準備会議 ・エリアプラットフォーム組成 ・社会実験の実施 	・エリブラ始動 ・ウォーカブルに向けた検討 ・社会実験の実施 	・未来ビジョンの具現化 ・ウォーカブルに向けた検討 ・上諏訪駅周辺地区整備基本 構想（案）策定 ・社会実験の実施	・ウォーカブルに向けた検討 ・西口駅前広場整備の検討 ・フィールドワーク実施
小諸駅周辺魅力向上PJ 【P14】	・官民連携の体制構築 ・まちなかDX社会実験（R3～R4） →回遊性向上への効果把握 駅前のニーズ把握 等 		・エリアビジョンの検討、公表	・エリアビジョン実現に向け た取組の推進	・大手門公園の滞留空間整備に 関する効果検証 ・エリアビジョン実現に向けた取 組の推進
信濃大町100人衆会議PJ 【P15】	・エリブラ組織（100人衆会議）				
	・道路利活用社会実験 →道路活用の可能性調査 等	・未来ビジョンの策定・公表	・まちなかのにぎわい日常化 に向けた検討		
中軽井沢地域活性化PJ 【P15】				・中軽井沢エリアプラット フォーム （ナカカルAP）設立支援	・社会実験等の実施検討
戸倉上山田温泉街 活性化PJ 【P16】	・専門家との現地調査 ・まちづくり講演会の開催	・ビジョンの検討（R5～） ・社会実験/効果検証（R5～）	戸倉上山田温泉まちづくり推進会議		・グランドデザインの策定・公表 ・社会実験の実施
		・住民主体のまちづくり組織構築 ・グランドデザインの検討開始（R6～）			
信州エリブラ情報交換会 【P17～18】				・小諸市、松本市、諏訪市での 情報交換、現地視察等を開催	・参加者を増やしながら継続開 催

UDC 信州 育む CULTIVATION

次世代の市町村まちづくりリーダーを育成！

信州まちづくりデザインスクール 2025



開講式の様子（前列左3番目から、石田UR都市機構理事長、出口スクール長、中井東京科学大特命教授、阿部県知事）

次世代の市町村まちづくりリーダーの育成

背景

市町村職員は、徐々に職員数が減少傾向にあり、財政的にも年々厳しさが増す中、地域資源・資産を有効活用し、地域経済の活性化を図るためには、制度を熟知したうえで、制度にとらわれ過ぎず、それを柔軟に活用し、あるいは新たな財源を自ら構想して行動する実践力を身につけることが、行政職員一人ひとりにこれまで以上に求められている。

スクール運営

○運営体制

◇ スクール長 出口 敦

（UDC信州センター長、東京大学執行役・副学長）

◇ 副スクール長 林 靖人

（UDC信州副センター長、信州大学副学長）

◇ 事務局

信州地域デザインセンター（UDC信州）、長野県建設部 都市・まちづくり課、【協賛】長野県都市施設協会

学習目標

事業構想力

資源を活かす事業化：構想と実装

地域資源を見立て、事業として立ち上げる力

協働推進力

多主体による地域運営：連携と実行

地域住民や民間事業者、他部門など多様な主体と連携し、実行に向けた調整と推進を行う力

価値デザイン力

価値の読み解き・仕組み化：見立てと設計

文化と営みを読み解き、活かし育てるしくみとして描き、財源を伴って動かす力

この3つの力を実践的に身につけるため、本スクールでは関連分野の第一線で活躍する専門家や実践者による講義と、県内各地をフィールドとした課題解決型のプロジェクト演習を組み合わせ、次世代の市町村まちづくりリーダーとなる行政職員の育成を目指す。

スクールの背景と学習目標

カリキュラムの全体像

信州まちづくりデザインスクール 2025



期間：7月～8月の週2回程度 延べ13日（15講義、3演習で構成）

カリキュラムの全体像

地域を取り巻く状況が大きく変わる中で、これからのまちの姿を思い描き、課題を整理しながら事業づくりにつなげていく力が自治体が増々求められています。UDC信州では、市町村からのまちづくり相談を受ける中で感じられた、課題解決に向けた取り組みに必要と考えられる様々なテーマの概念や事例等について、幅広く市町村職員が学ぶ機会を、これまで「まちづくりセミナー」として提供してきました。

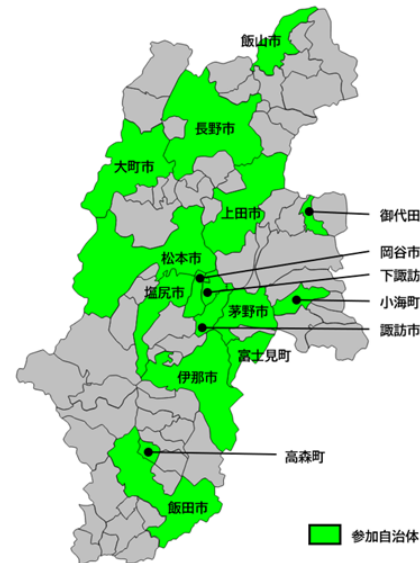
そして令和7年度には、この座学を中心としたセミナー形式を発展させ、より実践的な行動力を養う事を目的としたスクール形式の「信州まちづくりデザインスクール」を開講しました。このスクールは、まちづくりに必要な考え方や進め方を段階的に学び、日々の実務の中で活かしていくための“まちづくりのデザイン視点”を身につけてもらうことを目的としています。長野県初の、全国の先駆けになる取り組みです。

長野県内の16自治体に参加したこのスクールは、講義・演習・現地視察を組み合わせ構成され、7～8月にかけて集中的に実施しました。演習では、既存の事業を紐解いて構造を読み取る内容から始まり、塩尻市中心市街地を題材にしたプロジェクトの設計、その後に受講生それぞれが抱える自治体の課題を素材にした検討へと進み、段階を追って理解が深まるように構成されています。こうした流れの中で、課題の見立て方やテーマの設定、事業の骨組みを整える考えなど、まちづくりに取り組むうえでの基本的なプロセスを、実例に触れながら学べる内容となっています。

受講生の派遣自治体

年代	人数
20代	5名
30代	5名
40代	7名
50代	1名
平均年齢	36.9歳

職種	人数
事務	12名
建築	3名
土木	3名



スクール受講生の派遣自治体

県外視察演習と塩尻市での演習

県外視察演習（演習①）では、視察の目的を「まちの課題・ポテンシャルを多角的に把握し、まちづくり事業を読み解く力を身につける。」とし、まちづくりの参考事例となる都市からその手法や成功の要因分析などを行いました。視察の企画や視察箇所の選定段階からUR都市機構に全面的にご協力いただき、UR都市機構のコーディネート都市でもある東京都中野区と豊島区、栃木県鹿沼市のまちづくりの取組の視察を行いました。各都市それぞれで課題に応じたまちづくりを行っており、課題に応じて選択された手法、財源、関係者との調整など長野県内の市町村でも取り入れられることを意識しながら、先進事例視察を行いました。視察後は、グループ毎に対象地の読み解きを行い、発表をすることで学習目標の達成を図りました。

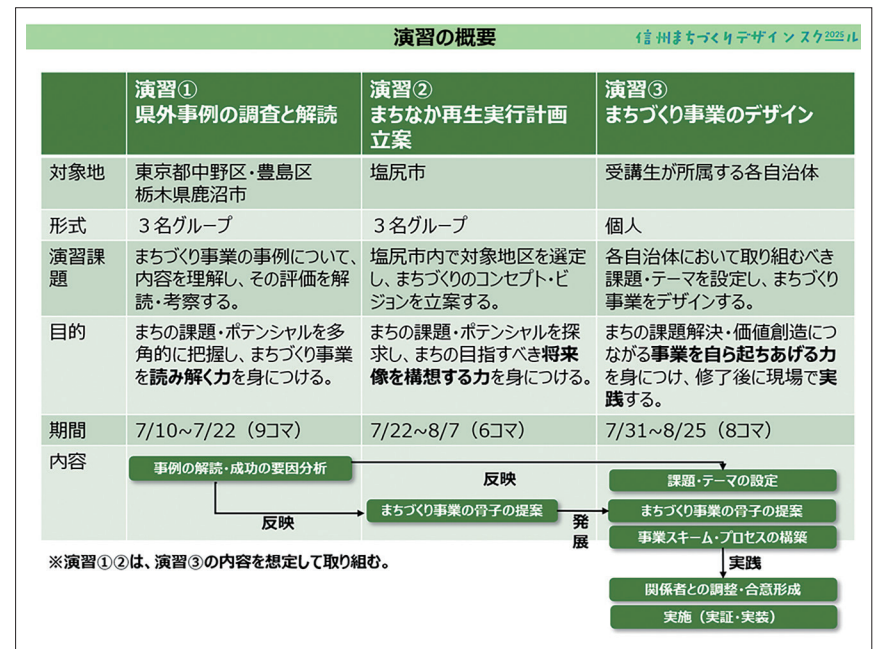
塩尻市での演習（演習②）では、演習の目的を「まちの課題・ポテンシャルを探求し、まちの目指すべき将来像を構想する力を身につける。」とし、演習①で鍛えた「読み解く力」や講義で学んだ事を活かし塩尻市の中心市街

講義

講義は、7分野全15講義が開催され、まちづくりの基本的な考え方や、事業づくりを進めるうえで押さえておきたい視点を丁寧に学んでいきました。事例をもとにした解説や、実際の現場で使われている手法の紹介など、日々の業務にそのまま結びつく内容を中心に構成されています。また、講師との対話を交えながら、受講生自らの地域課題の捉え方やまちづくりのテーマ設定のポイントを確認していく機会ともなっています。講義で得た知識が、後半の自らのまちの演習に自然とつながるよう、段階的に深めつつ学べる流れとなっていました。

地を対象として、まちづくり事業の検討・提案をグループ毎に行いました。塩尻市のまちの課題やポテンシャル、既存の事業や取組を読み解きながら将来像を構想し、将来像を実現する

ための事業や取組をグループ毎に議論しました。受講生同士が議論を行うことで、これまで学んだことを活かす力を身に付けることができました。



演習の概要



県外演習（鹿沼市）の様子



演習のグループ発表の様子

まちづくり事業のデザイン

まちづくり事業のデザイン演習（演習③）では、演習の目的を「まちの課題解決・価値創造につながる事業を自ら起ちあげる力を身につけ、修了後に現場で実践する。」とし、演習①、演習②と各講義で学んだ事を総動員し、受講生が各自自治体において取り組むべきまちづくり事業の起ち上げを行いました。自らのまちづくり事業をデザインするにあたり、自らのまちの課題やポテンシャルを改めて分析し、新規のまちづくり事業の起ち上げや現在の事業のブラッシュアップ案を検討しました。演習③に取り組み始めた頃は課題やテーマ設定に悩んでいた受講生達でしたが、出口スクール長はじめとしたスクールアドバイザーの方々

との議論を通して、最終的にはすばらしいまちづくり事業を提案することができました。演習③の最大の特徴はスクール終了後も実際の事業として各自自治体で実践することにあります。受講生が提案した演習成果については、

スクール修了後、各自自治体における予算要望資料として活用されるほか、庁内検討チームが立ち上がるなど、実現に向けた取り組みが進められています。

市町名	タイトル	市町名	タイトル
諏訪市	上諏訪駅周辺整備プロジェクト ～駅西口からまちなかへ～	大町市	ポケットパークをデザイン・リノベーション ～使われない公園から使われる公園へ～
松本市	松本らしい「ひと・まち」づくり	大町市	まちのリボ押しプロジェクトで プレイメイキングプロジェクト まちをつかう「関わり」を増やし ゆるやかに束ねる仕組みづくり
飯田市	飯田市中心市街地を“結ぶ”まちづくり	富士見町	富士見駅周辺地区整備事業
伊那市	セントラルパークをリニューアル！ ～3つのエリアを繋ぐ拠点に～	飯山市	お寺からはじまるまちの回廊 ～暮らしと歴史をつなぐ 日常の拠点づくり～
御代田町	県所有の未利用地を活用したまちづくり	岡谷市	ラオカや解体のチャンス!! 楽しく歩いて滞在する童画館通りP
塩尻市	コミュニティバスの将来 ～利便性低下で満足度向上へ～	高森町	町のサードプレイスMIZBEステーション 上田駅周辺再整備計画
塩尻市	ウォークアブル × エリマネから “いきだまち”の実現	上田市	若者にとって住み続けたいと思える 都市を目指して
下諏訪町	健康・交流・観光が融合する 諏訪湖畔の空間創造 ～ウェルビーイングを育むまちづくり～	小海町	高齢者・障がい者が住みやすい 誰もとり残さない地域づくりをめざして
茅野市	茅野駅西口の再編 ～エリア価値の向上をめざして～	長野市	善光寺表参道再生プロジェクト ～稼げる・憩える・誘われるストリートの実現～

※並びは受講生氏名の五十音順

演習③のタイトル一覧

宮本さん（飯山市）の 演習発表について

飯山市宮本さんの発表は、寺院がかつて担っていた教育や戸籍管理といった地域のよりどころとしての役割に着目し、その公共性を現代のまちづ

くりに生かそうとするものでした。飯山市には寺院が集まる独特の景観が広がっており、これらを日常的な拠点として再生し、子どもを介して多世代が自然につながる「まちの回廊」を形づくる構想が示されました。発表では、

寺院を開いて子どもたちが過ごせる場をつくることからはじめ、回遊性の高いまちの動線づくりへと段階的に広げていく考え方が示され、歴史や文化を大切にしながら、暮らしに溶け込む新たな地域の姿が描かれています。

まちの回廊実現に向けた施策と段階的推進

寺院を拠点に日常の活動を段階的に展開・回遊ネットワークを構築

開ざされている寺院の本堂・庫裡を開放し、子どもたちが寺院で過ごす体験から始め、徐々に多世代交流・回遊性を高めていく成功体験アプローチを推進。

- 短期（～3年）
寺院ライブラリー＆交流スペースの設置。子ども館から・保育園との連携
- 中期（4～7年）
多世代交流プログラムの定着、寺院のサテライト拠点化、既存の寺町回遊マップの拡張
- 長期（8～10年）
寺院でのカフェ・テレワークスペース導入検討、持続的拠点化
※金沢市事例：「坊さんの場」でボサノバ

止聖庵通学舎（教育プログラム）
（写真：止聖庵）

大聖寺 門前市
（写真：大聖寺）

地域で広がる日常と将来像

寺院と子どもを核としたまちの回廊づくりは、多世代交流・文化継承を加速化させます。

「お寺からはじまる まちの回廊」の実現により、子どもたちの笑顔が寺町に広がり、お年寄りから子どもまで多様な世代が交わる持続可能な地域社会が形成。

- 子育て支援の拡充
寺院をサテライト拠点とすることで、放課後の居場所が確保。子どもたちの活動範囲が広がります。歴史や文化に触れる機会も自然と増えていきます。
- 歩行圏で回遊促進
寺院・子ども館・学校・地域公園・商店街を結ぶ回遊ルートが形成され、徒歩や公共交通での生活を定着させます。
- 寺院の公共性と文化継承
住職だけでなく、地域全体で寺院を支える意識が高まり、文化財の保存・継承により地域の歴史資産が守られる。
- 地域への波及
寺院回廊による歩行者が商店街に立ち寄り、観光と商業の融合が地域経済を支える持続的な仕組みを確立。

寺院を拠点とした多世代交流（子どもと地域住民の交流）

宮本さんの提案資料①

宮本さんの提案資料②

飯山市 まちづくり課
宮本 掌悟 さん

自身の公務員としての実務で形成された思考の枠組みそのものが揺さぶられる学びでした。まちづくりとは誰の課題であり、誰のための施策なのかという根本的な問いに向き合い、十分に立ち返れていなかったことを改めて認識しました。その問いを起点に考えることで、同じ「まち」は一つとして存在せず、固有の歴史や文化は捉え方次第で魅力にも課題にもなり得ることを学びました。そうした価値を風格あるブランドへと昇華させ、まちづくりを実践していきたいと思います。

演習演習経過報告会について

信州まちづくりデザインスクールの閉講から約2か月が経過した令和7年10月30日、演習③の進捗を図ることを目的として、「信州まちづくりデザインスクール演習経過報告会」（以下「経過報告会」という。）を東京大学にて開催しました。

本報告会は、受講生から「スクール修了後も演習③について出口スクール長から助言をいただきながらブラッシュアップを進めたい」との思いがきっかけで開催したものです。

受講生からは、演習③の進捗状況や新たな課題について報告・共有を行うとともに、出口スクール長をはじめとする講師陣から助言をいただき、演習のさらなる推進を図りました。

また、「予算要望に向けて動いている」「庁内に検討チームを立ち上げた」「関係者へのヒアリングを開始した」などの報告があり、受講生同士が互いに刺激を受け、学びを深める機会となりました。

た。経過報告会で得られた知見や刺激が、今後の演習成果の実現に向けた取組につながることを期待しています。



演習経過報告会の様子



演習経過報告会の様子

まとめ

まちづくりのデザイン視点を身につけ、次世代のまちづくりリーダーの育成を目指し、UDC信州としても初めての取組としてスタートした「信州まちづくりデザインスクール」ですが、演習③の発表の様子や、スクール修了後

の各自自治体での受講生の活躍を伺うとその目的は十二分に達成できたのかと思います。さらに5年後、10年後、20年後には受講生が長野県内各地のまちづくりを引っ張っていくリーダーになっていることでしょう。

「信州まちづくりデザインスクール」は今年度の取組をブラッシュアップさせ2026年度も開講し、次世代のまちづくりリーダー育成に取り組んでいきます。



閉講式の様子



閉講式での阿部県知事挨拶



演習③ポスターセッションの様子

「都市計画と文化政策（アート）」

岡田 潤

東京大学 大学院新領域創成科学研究科 社会文化環境学専攻 特任助教

芸術祭をはじめとして、アート×まちづくりの事例は全国で増えつつあるが、そもそも、都市計画と文化の関係をどのように捉えるべきか。我が国における都市計画のあり方を概観する上で、1968年に制定された都市計画法では、第2条で都市計画の基本理念として次の文章が掲げられている。

“都市計画は、農林漁業との健全な調和を図りつつ、健康で文化的な都市生活及び機能的な都市活動を確保すべきこと並びにこのためには適正な制限のもとに土地の合理的な利用が図られるべきことを基本理念として定めるものとする。”

これに基づくと、“都市計画は「健康で文化的な都市生活」のためにある”ということが、都市計画と文化の関係を示すひとつの考え方である。都市計画法の制定された高度経済成長期から半世紀以上が経過した今日において、その理念は変わらないとしても、現場での理念の受け止め方には、変化があって然るべきであろう。すなわち、人口減少が進む時代の各自治体において、健康で文化的な都市生活をいかに持続させるか。そのために都市計画と文化政策はどのように連携できるのか——ここに、いま改めて向き合うべき論点がある。

振り返れば、あらゆる都市や町において、中心市街地はかつて商業の集積によって成立していた。しかしモータリゼーションの進展とともに商業機能は郊外へ流出し、中心市街地の衰退が進む。2000年代の中心市街地活性化政策は、この状況への応答として展開されたが、その効果は限定的だったと言わざるを得ない。2010年代後半になると政策の焦点は、人口減少への対応策としての「コンパクトシティ」へと移行した。都市機能と居住機能を一定の区域へ誘導し、公共交通ネットワークで結ぶことで、人口減少時代の自治体経営の持続可能性を高めようとする発想である。この流れの中で、まちなかの文化施設の整備・活用が「都市機能」の一つとして注目された。さらに近年の「ウォーカブルなまちづくり」の潮流において、歩いて楽しめるまちなかの再編が、商業活性化・健康増進・環境負荷低減といっ

た政策課題につながる重要なテーマとなった。こうした文脈の延長線上に、公共空間の利活用が全国的に広がり、そのプログラムとしてアートの重要性も一層増してきている。

ただし、アートを“賑わい”の演出のプログラムにとどめてしまうと、人口減少がもたらす構造的な課題に対しては十分に応答できない。“賑わい”づくりを目指すことは、非日常的なイベントに偏重した公共空間利活用をもたらす恐れがある上に、そもそも、冒頭に記した都市計画の理念に立ち返れば、アートは都市計画やまちづくりの道具であるべきではない。では、人口減少時代において、“賑わい”ではなく、何を目指すべきか。それは、「市民の営みの豊かさ」ではないだろうか。

そこで、都市計画と文化政策が目指すべき方向性の一つが、「アーバニストを応援するひと・まちづくり」である。アーバニストとは、何らかの専門性を持った都市生活者のことだ¹⁾。そのような市民の営みは、いわゆる仕事・労働よりも、趣味や愛好といった自発的な活動を起点としている。好きなことや得意なことが高じて、その活動が深化すると、ローカルで固有の知見や技能を伴った“アーバニスト的活動”へと発展し、やがて小商いなどの事業につながる可能性が生まれる。このような営みの発展プロセスにおいて、アートの意義は大きい。アートは直接の経済効果だけではなく、市民の創造性を高め、他者との関係を編み直し、場に新しい意味を与える力を持つ。つまり、アーバニストの自発性と専門性を育てる土壌として、文化政策は都市政策の中核に入り得る。移住促進、遊休アセットや老朽文化施設の活用・更新、公共空間の利活用などといった政策課題は、いずれも、アーバニストを応援する基盤づくりとなる。

しかし現実には、基礎自治体が直面する課題は厳しい。人口減少は財政規模の縮小と職員数の減少を同時にもたらし、行政の“実装能力”そのものを細らせていく。こうした状況の中で、文化芸術は市民生活を支えるライフラインとして位置づけられるのか。限られた予算の中で文化政策をどう設計すべきか。あるいは文化芸術は本当に市民の豊かな生活を支えられるのか。

そこで鍵になるのが、都市計画行政と文化行政の「連携の仕方」を、行政同士の縦割り連携としてではなく、現場を支える“中間支援”の連携として捉え直すことである。文化政策側には地域アーツカウンシル（地域AC）のように、行政と一定の距離を保ちながら政策を執行し、担い手を支援する枠組みがある。他方、都市計画分野にはアーバンデザインセンター（UDC）という、公民学連携でまちづくりを進める中間支援組織が存在する。制度的な立ち位置は異なるが、活動の中身に目を向けると、担い手を支え、プロジェクトを伴走し、知見を共有するという意味で共通項は多い。ならば、都市計画分野と文化政策分野の連携は「中間支援組織同士の連携」という形で具体化し得るのではないか。

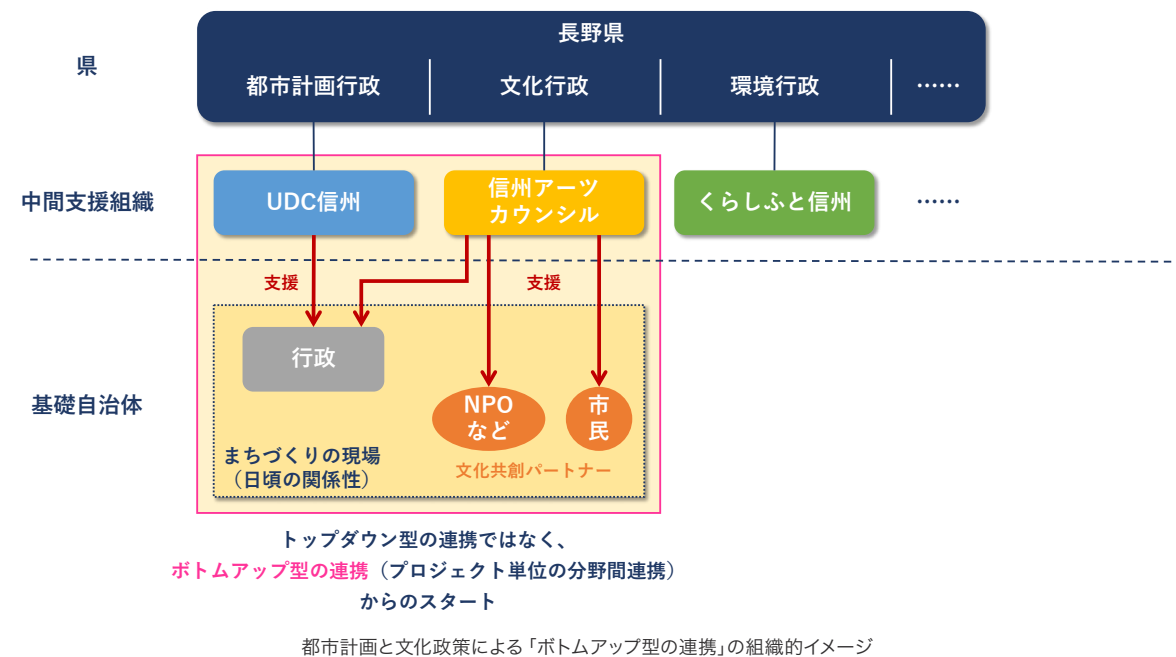
この検討にあたって、長野県は興味深い事例である。一般に地域ACは県単位で設置されやすく、長野県も県単位の地域ACである「信州アーツカウンシル」を有する。一方、UDCは市区町村単位や中心市街地など比較的狭域で展開されることが多い。しかし「UDC信州」は、全国的でも唯一の県単位のUDCであり、「信州アーツカウンシル」と活動範囲が重なる。つまり、文化政策と都市計画

の“広域中間支援”が同じ地平で動きうる条件が揃っている。

長野県のように山脈が盆地を分かち、地域性が多層的に存在する広域自治体では、地域単位、あるいは鉄道沿線や河川流域、山岳文化圏などでの連携が重要となる。「信州アーツカウンシル」が主にソフト事業の観点から、「UDC信州」が主にハード事業の観点から、基礎自治体への支援を担う。基礎自治体において、日頃から行政とアーバニストの関係性が構築されていれば、県の担当部署同士がトップダウンで連携方針を掲げるよりも、プロジェクト単位で、ボトムアップ型の連携を積み重ねる方が現実的であろう。

「広域連携」「中間支援」「分野横断」の3軸により、専門性をもった市民＝アーバニストの自発的な営みを育て、都市生活の質そのものを更新していく。それこそが、人口減少時代の「健康で文化的な都市生活」を支える都市経営の方法ではないだろうか。

1) 中島直人、一般社団法人アーバニスト(2021)「アーバニスト：魅力ある都市の創生者たち」, 筑摩書房



岡田 潤

2019年東京大学工学部都市工学科卒業、2024年東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻修了。博士（環境学）。専門は都市計画・アーバンデザイン。著書に『余韻都市』（共著、鹿島出版会）。「アートと都市と公共空間」研究会メンバー。

発信する MEDIA

UDC信州の公式WEBサイトをご紹介します！

進行中のPJ
詳細はこちら



週に1回程度の頻度で UDC 信州の活動や県内外のまちづくり情報を発信

公式WEBサイト

- ・令和7年度 32,714 view
- ・発信コラム数 32コラム



公式SNS

f facebook



Instagram



公式メールマガジン

- ・毎月最終金曜日に配信（全12回）
- ・メルマガ登録者数 971名
- ※新規登録は右のQRコードからお願いします。



UDC 信州
発信する
MEDIA

おわりに UDC信州スタッフより

常駐スタッフ

チーフコーディネーター 矢口（長野県）

UDC信州でまちづくりに携わり2年目となりました。今年度は、初めての試みとして、信州まちづくりデザインスクールを実施し、16市町18名の受講生の皆さんと、まちの課題の読み解きから課題解決の手法まで演習をするのと同時に、普段では中々聞くことができない講師の方々とても刺激的な講義を受けました。この学びが、県内各地でまちづくりが積極的に展開されることを期待しています。

これからも、いろいろな方々とのつながりを大切に、まちづくりを進めていきたいと思っています。

関係された多くの方々に感謝申し上げます。

2年間、ありがとうございました。

コーディネーター 安田（長野県）

UDCのメンバーとなって瞬間に半年が過ぎましたが、この間多くの方とつながる機会をいただき、オンライン会議を含めてまちづくりの考え方をお聞きすることが出来ました。担当案件はまだ持ってはおりませんが、今後担当することになれば、様々な方からサポートをいただき、プロジェクトを少しでも前に進めることが出来れば良いと考えています。今後も関係者の皆様と一緒に試行錯誤しながらまちづくりを頑張ります。

コーディネーター UR都市機構

令和7年度は「信州まちづくりデザインスクール」の企画構想段階から参加してきました。

スクールカリキュラムの一つ「県外演習」において、「まちづくりの実践事例」としてURがかかわる3地区、東京都中野区の密集市街地改善、東京都豊島区の防災公園整備、栃木県鹿沼市の地域活性化の現場視察を通じて、様々な気づきや学びを得てもらえたものと思います。

この経験を、地元のまちづくりに活かしていただくことを期待します。

URは、引き続きUDC信州の一員として長野県のまちづくりを支援していきます！



センター長 出口 敦（東京大学）

人口減少の進行に伴い社会構造が大きく変化する中で、まちづくりを取り巻く課題は多様化・複雑化しており、各地域において様々な課題に直面しております。このような状況下においては、地域が有する魅力や資源を改めて見つめ直し、それをいかに磨き上げ、将来へとつなげていくのが、今後のまちづくりの重要な鍵であると認識しております。

また、これらの課題に的確に対応していくためには、まちづくりを担う人材の育成が喫緊の課題であると考えております。UDC信州では、「支える」「育む」「発信する」の三つの活動方針のもと、公・民・学の関係組織、専門家、市町村等と連携しながら、県内各地におけるまちづくり支援を引き続き進めるとともに、担い手の育成にも一層力を入れて取り組んでまいります。

サブチーフコーディネーター 石川（長野県/UR都市機構）

今年度は、これまで進めてきた広域PJや個別支援地区に加え、「信州まちづくりデザインスクール」や「信州エリブラ情報交換会」などの新たな取り組みをスタートさせ、忙しくも多くの新たな知識や経験を得た非常に有意義な1年でした。（アート×まちづくりという視点や大型バスの上座がどこかとか）

長野県内のまちづくりに携わって2年が経過し、関わるエリアも昨年より広がっているものの、まだまだ長野は広い！来年度も引き続きという立場ですので、プライベートも含めて活動範囲をさらに広げ、個人的には小さくてもハード整備に繋がたい、そんなチャンスを狙っていききたいと思っています。

コーディネーター 調（長野県）

今年度は上期にスクール事業、下期にしな鉄駅まち調査と、4年の在籍でも初めての経験をさせて頂きました。スクールでは県内の各地に未来を担う方々がいるんだ、と実感できた機会でした。駅まち調査では、AI解析で具体的な人流データを取得したり、まちの方の声も集め、多角的に、駅まち空間のいまが見えてくる機会でした。UDC信州に4年間勤めて参りましたが今年で退職です。UDC信州の仕事は多様な方と交わり「公共をつくる」仕事ではなかったかと思っています。退職後も、私なりの公共をつくる行為をしていきたいと考えています。4年間ありがとうございました。



アドバイザー 新 雄太（東京大学）

20世紀型の大きな一つの矢印では、まちの流れは淀んでしまうと感じています。むしろ、雑多で多様な「小さな矢印の群れ」がつくるまちの流れが、そのまちの魅力を高めているのではないのでしょうか。てんでばらばらではなく、何となくの方向性を分かち合うことで、流れができていく。だからこそ地域ビジョンが求められているのだと思います。地域課題そのものも学びやイノベーションの源泉として捉え、様々な小さな挑戦が育まれる、そんな文脈をいかに流していけるのでしょうか。その流れを生み出す域内外の小さなつくり手たちを「共創人口」と呼び、注目しています。共創人口がつくりだすカオスな状態を、定量・定性的に可視化してみたいもんです。



副センター長 林 靖人（信州大学）

近年、特定国の日本渡航が制限され、地域や事業者は大きな打撃を受けました。観光は、感染症の拡大や国際情勢、為替変動、さらには旅行スタイルや社会ニーズの変化など、多様な外的要因に影響を受けます。だからこそ、顧客数や地域資源のキャパシティを見極め、自然・文化資源の保全と経営の安定を両立させる視点が不可欠です。そして、まちづくりも同じです。従来の量の拡大から質と適正規模へと発想を転換し、地域価値の再設計を行い、自然・人両面のサステナブルシティの構築に向けて、地域の皆さまとともに挑戦してまいります。

コーディネーター 内山（長野県）

UDC信州のメンバーとなり、気づけばあっという間の一年でした。この一年で多くの市町の皆さまとまちづくりについてお話させていただき、地域ごとに異なる視点や課題に触れる貴重な機会となりました。改めて「まちづくりとは何か？」を考えると、それは特別な誰かが進める事業ではなく、そこで暮らす人や関わる人が、より心地よい日常をつくるように積み重ねだと感じています。まだ答えは探している途中ですが、これからも皆さんと一緒に、その地域らしさを育てる関わりを続けていきたいと思っています。

コーディネーター 内田（伊那市）

伊那市からの交流職員として1年間お世話になりました。長野県各地でまちづくりに携わる方々や活動に触れ、多くの学びを得ることができました。特に「信州まちづくりデザインスクール」では、スタッフ兼受講生として参加し、「このまちを更に良くするにはどうしたら良いか？」講師の先生方や受講生の皆様とともに考えたことは貴重な経験です。来年度からは伊那市の職員として、まちづくりに携わります。ここで得た経験を活かし、一人のプレイヤーとして、魅力あるまちを具現化できるよう挑戦していきたいと思っています。



アドバイザー 山下 裕子（まちなか広場研究所）

「文化政策学会」という学芸員の皆様の会。私は、図書館に、美術館に、たくさんお世話になっていながらも初耳で。その会において、いま！長野県が話題で。それは、信州地域デザインセンター（UDC信州）と信州アーツカウンシル、更には、くらしふと信州（ゼロカーボン社会共創プラットフォーム）が県単位である唯一の県だから。77市町村の皆様が地域の固有性を残されるなかテーマごとのプラットフォームがしっかりと形成され、そのゆるやかなつながりを基礎に長野県という領域に立ちかえったとき、分野を超えたゆるやかなつながりはすでにたくさん育まれていそうです。地域の固有性を基盤に、はじめる。プロセスこそ、事業の「柱」と実感した本年。2026年をさらなる芽吹の年に。



「(参考)日本文化政策学会 HP」



副センター長 三牧 浩也（東京大学）

手元のPCからふと目をあげると車窓に出会う浅間山の雄大な稜線に、打ち合わせのあと少し足を延ばすといつも静かに迎えてくれる諏訪湖の大きな水面に、そして、当たり前のようにあるまちかどの豊かな歴史の面影に、信州に通う機会が多かったからこそ、何度も感動をもらう一年でした。激変と「縮小」の時代、いろいろ難しさはあれど、古きを愛で、その上に新たな暮らし・産業・文化を積み重ねようとする人たちがつながり、官民を超えて確実に大きな動きになりつつあります。ただ、まだまだ突破する経験と力が足りないのも現実。「信州」だからできる「地域デザイン」を広げ、かたちにするためにUDC信州も力をつくしたいと思います。

コーディネーター 土屋（長野県）

諏訪市の社会実験「スワマチスローハイク」に遊びにいったり、女神湖湖畔のホテルに泊まったり・・・と担当の地区にプライベートでも訪れて楽しい時間を過ごさせていただきました。まちづくりの仕事って「自分の住んでいるまちがもっと楽しくなって欲しい！」と公私混同して、楽しんで取り組んでいいのだと気付かされた1年でした。

UDC信州に在籍した2年間で振り返ると長野県内たくさんのまちのファンになった2年間でもありました。それは悩みつつもまちづくりに熱意をもって楽しんで取り組んでいる皆様のおかげかと思っています。2年間本当にありがとうございました！



アドバイザー 土屋 修

信州地域デザインセンター設置検討委員会以来、UR都市機構の役職員として、UDC信州の活動をサポートさせていただき、今年度は、縁あって、信州まちづくりデザインスクールのお手伝いもさせていただきました。その中で、設置検討委員会の結論のひとつである「広域（鳥の目）が大切」ということが、長野県のまちづくりにも根づいてきたことを頼もしく思いました。まちづくりは、自分の足と頭を使って、いろいろ考えて、いろいろな方々と議論することが大切だと思っています。今後も、まちづくりを実行する方々が、UDC信州のスタッフとたくさん議論していただけることを期待しています。

UDC信州

信州地域デザインセンター

8:30~17:15 (土・日・祝祭日休)

〒380-0832

長野県長野市東後町16-1 2階

TEL 026-405-4861

MAIL info@udcshinshu.jp

WEB <https://udcshinshu.jp>

Facebook @udcshinshu Instagram @udcshinshu

長野駅より徒歩16分

※お車でお越しの際は、近隣のコインパーキング等をご利用ください。



◀公式WEBサイト

